

令和2年4月14日

孤独であるためのレッスン

休校になって2週間になります。生徒の皆さん、いかがお過ごしですか？

「いつも笑って 前向きに暮らせますように・・・」

前任の取手一高で、七夕の季節に、あるクラスで見つけた短冊の言葉です。

去年の七夕の時期、まさかこのような状況になっているとは想像もできませんでした。当たり前であったことがそうでなくなっている昨今、この言葉がとても身に沁みます。

さて、4月6日（月）～15日（水）の10日間は、春の交通安全運動の期間です。令和元年の高校生の交通事故による負傷者数は349、死者数は6（いずれも茨城県警察本部交通総務課の統計）となっています。休校中でもあり、以前に比べれば外出する機会も減っているとは思いますが、この機会にあらためて「いのちの重さ」について考えてみましょう。

竹内まりやさんに「いのちの歌」という作品があります。去年の紅白歌合戦でも披露されたので、お聞きになった皆さんもいらっしゃるかと思います。

生きていく意味を問いかける彼女自身の作詞（Miyabiという名義になっていますが…）が、村松崇継（たかつぐ）さんの優しすぎるメロディーに乗って流れます。

この作品については始業式、入学式でも取り上げさせていただきましたが、ここにも「感謝」の言葉が紡がれています。

この休校期間に、もう一度本校校是である「礼節を重んじ、日々大事に生きることを心がけてください。そして、この期間を自分と向き合う大事な時間と捉えてみてください。

そのための一つのヒントのなるのが例えば、明治大学の諸富祥彦先生の著書『孤独であるためのレッスン』です。

諸富先生は、この著書の中で、エリーズ・ボールディング著『子どもが孤独（ひとり）でいる時間（とき）』を引用し、「子どもは生活のどこかで孤独でいる時間を必要としていること、「人間にはひとりでいるときにしか起こらないある種の内面的成長がある」こと、ひとりになり自分と対話する時間を持たず、絶えず外界からの刺激に身をさらしてばかりいると、刺激におぼれて、想像力や創造性の発達が妨げられてしまうこと」について触れています。

ピンチはチャンスといいます。どうかこの休校期間中、自分との対話を十分に行ない、一回りも二回りも大きな自分になって戻ってきてください。